

# 国産トリユフ 技術よ芽吹け

世界三大珍味の一つとして知られ、「黒いダイヤ」とも呼ばれる塊状のキノコ、トリユフ。美濃市曾代の県森林研究所では、部長研究員水谷和人さん（左）が国産トリユフの人工栽培を研究している。日本での栽培は実現していないが、トリユフ菌を野外の木に接種する方法で道筋が見えたといい、今後は条件を調べて発生の確率を上げていく。  
（本間貴子）



## 県森林研究所

栽培に取組む日本自生種の黒トリユフ  
トリユフ菌を根に感染させたコナラの苗木を育てる水谷さん（美濃市曾代の県森林研究所）



成木の根に感染したトリユフの菌根（中央）

### 野外樹木に菌根 人工栽培に道筋

水谷さんは、関市わかぐさ・ブラザで一日に開かれた県森林・林業関係合同発表会で取り組みを説明した。

トリユフはマツタケのように生きた木の根に共生して生育する。欧州では苗木の根に菌を感染させ、露地に植えて育てているが、収穫までに七年かかるという。水谷さんは「日本とはトリユフの種や風土も異なるため、新しい技術開発が必要。大きな木に感染させて短期間での発生を目指す」と話す。

水谷さんの研究では日本に自生する黒トリユフ、白トリユフの二種類を使う。トリユフの胞子を含んだ水に苗木の根を浸して感染させ、春に県内の人工林六万所でクヌギ、コナラの成木近くに苗木を移植した。

トリユフ菌は直径2〜3以下の細い根に感染するため、苗木は幹から五十センチ離し、事前に成木の根を切断して細い根を増やす処理をするのがポイントだ。

苗木の代わりに自生トリユフ周辺の土壌を埋設する実験もした。

半年後に調べたところ、白トリユフは苗木・土壌ともに成木への感染が確認でき、茶色の棒状のトリユフ菌根ができていた。水谷さんは「まだ確率は非常に低いけど、成功例が見つかった」と喜ぶ。

苗木の根には黒、白トリユフともに30〜100%の高確率で感染している。欧州のような露地栽培でもうまく育つかもれない。樹木との共生関係を明らかにして好条件を見つけたい」と意気込む。

岐阜県森林研究所ホームページ掲載期限：平成32年3月11日

この記事は中日新聞社の許可を得て掲載しています。